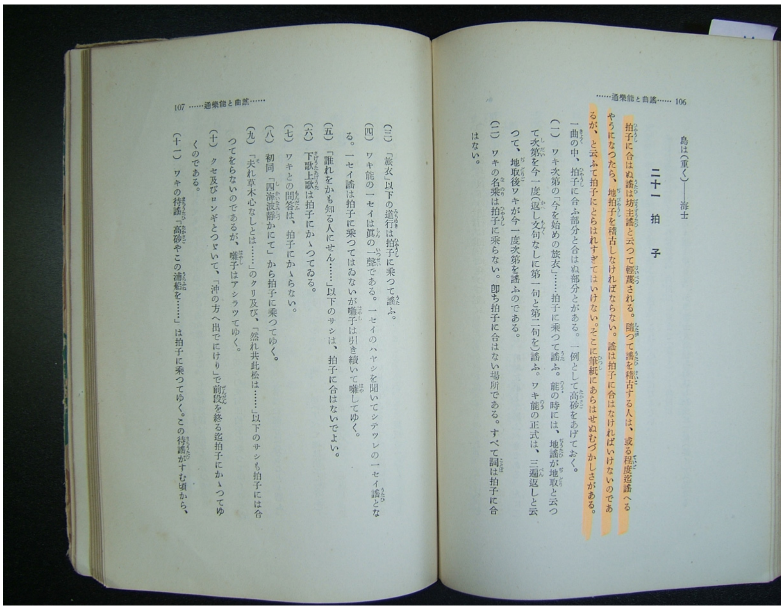
横井春野『謡曲と能楽通』

謡についての一般知識をあたえるための書。謡、能、能狂言の三編のうち、謡には約百頁が費やされる。謡の二一項目の最後に、拍子が説明される（約六頁分）。「拍子に合はぬ謡は坊主謡と云つて軽蔑される。随つて謡を稽古する人は、或る程度迄謡へるやうになつたら、地拍子を稽古しなければならない」（写真下冒頭）とある。ふつうの謡の学習者がおかれる環境では、拍子の学習は最後であり、量も少ない。それは、このような謡入門書の構成にも反映するのだ。



……謠曲と能樂通…… 106

島は(重く)——海士

二十一　拍子

拍子に合はぬ謠は坊主謠と云つて輕蔑される。隨つて謠を稽古する人は、或る程度迄謠へるやうになつたら、地拍子を稽古しなければならない。謠は拍子に合はなければいけないのであるが、と云ふて拍子にとらはれすぎてはいけない。そこに筆紙にあらはせぬむづかしさがある。

一曲の中、拍子に合ふ部分と合はぬ部分とがある。一例として高砂をあげておく。

(一)　ワキ次第の「今を始めの旅衣」……拍子に乘つて謠ふ。能の時には、地謠が地取と云つて次第を今一度(返し文句なしに第一句と第二句を)謠ふ。ワキ能の正式は、三遍返しと云つて、地取後ワキが今一度次第を謠ふのである。

(二)　ワキの名乘は拍子に乘らない。即ち拍子に合はない場所である。すべて詞は拍子に合はない。

107 ……謠曲と能樂通……

(三)　「旅衣」以下の道行は拍子に乘つて謠ふ。

(四)　ワキ能の一セイは眞の一聲である。一セイのハヤシを聞いてシテツレの一セイ謠となる。一セイ謠は拍子に乘つてはゐないが囃子は引き續いて囃してゆく。

(五)　「誰れをかも知る人にせん……」以下のサシは、拍子に合はないでよい。

(六)　下歌上歌は拍子にかゝつてゐる。

(七)　ワキとの問答は、拍子にかゝらない。

(八)　初同「四海波靜かにて」から拍子に乘つてゆく。

(九)　「夫れ草木心なしとは……」のクリ及び、「然れ共此松は……」以下のサシも拍子には合つてをらないのであるが、囃子はアシラツてゆく。

(十)　クセ及びロンギとつゞいて、「沖の方へ出でにけり」で前段を終る迄拍子にかゝつてゆくのである。

(十一)　ワキの待謠「高砂やこの浦船を……」は拍子に乘つてゆく。この待謠がすむ頃から、

標題

内　題…謡曲と能楽通

標題紙…通叢書　謡曲と能楽通

奥　附…謡曲と能楽通

その他…謡曲と能楽通（目次・巻末・表紙）

著者

奥　附…横井春野

その他の場所…横井春野（標題紙・序）

出版

版　次…第一版

出版地…東京

出版社…四六書院

出版年…昭和５（1930）

その他の場所…序　昭和５（1930）

形態

冊　数…一冊　　頁　数…一九八頁

寸　法…19×13（㎝）

状態

写本版本の別…版本　現物複写の別…現物

備考